

# 大学生における携帯電話依存傾向と内的対象想起との関連

The relationship between cell-phone-dependent and internal objects remembering in college students

土本亜矢子・緒賀郷志

TSUCHIMOTO Ayako and OGA Satoshi

## 問題

日本で携帯電話サービスが開始されたのは1979年である。その後、保証金制度や新規加入料の撤廃、基本使用料や通話料の値下げ、さらには携帯電話本体の小型・軽量化を経て、1990年代半ばから急速に普及し、個人の携帯電話の利用率は、13-19歳で69.6%、20-29歳で95.2%（総務省、2004）となっている。

そのようななか、近年携帯電話の使用についてさまざまな社会的問題がとり立たされている。たとえば、携帯電話操作が原因となる事故が多発したため、平成11年に道路交通法で携帯電話の使用に関する規制ができ、平成16年にはさらなる罰則規定が強化された。また、電車内や病院内などで携帯電話の使用自粛のお願いがされているにもかかわらず、そのお願いがあまり守られていない現状がある。大学生に焦点を当てて考えてみると、授業中にメールを作成している人や、試験中に携帯電話の電源を切るように言われたにもかかわらず、そのままにして着信音を鳴らせる人たちが頻繁に見受けられる。

このような中で、耳にするようになってきたのが携帯電話依存という言葉である。携帯電話依存の定義に関しては様々あるが、戸田・門田・久保・森本（2004）は「時間的あるいは道義的に節度を越えた携帯電話の使用」、今野・川端・上笹（2004）は「携帯電話が通じない状況を嫌い、常に携帯電話が通じている状態でいようとする心理状態」と定義している。

さて、先に述べた問題はいままでのところ、多くの場合マナーが悪いとか正式にルールを作れば良いなどと議論されている。しかし、これほどまでに携帯電話依存が起きているのは、単

なるマナーの問題だけではなく、そこには心理的要因があると考えられよう。その要因のひとつとして、本研究では内的対象の想起を取り上げる。

内的対象とは、外界の客観的对象とは別に投影、取入れなどの機制によって心の内部に形成されるもので、無意識的幻想を生む上で重要な働きをする。この内的対象の想起が正常に行われなかった場合、非常に不安定で衝動性の強い人格になりうる。境界例人格障害までいかなくても、重松（2005）は「臨床の場に限らずとも日常生活のなかで境界例的な人（境界例的な心性の人）が頻繁に見受けられる」、「境界例的な心性が高いほど孤独感が高く、ひとりでありえず、不安定な「永続しない対象」や迫害的な「悪い対象」を想起しやすいことが示唆された」と述べている。

このような境界例的な人が「他者といつでもどこでも繋がっていられる道具」である携帯電話を手にした場合、以下のようなことが考えられるであろう。ひとりであることを恐れるため、携帯電話を肌身離さず持ち歩き、たいした用事もないのにメールや電話をする。いつでもどこでも繋がっていることを当たり前だと感じ、相手からのメールや電話の返信が遅いとイライラしたり、自分が嫌われていると思うなどの不安になる。これらの状態はまさに携帯電話依存といえるだろう。つまり、内的対象の想起が正常に行われない人ほど携帯電話依存になりやすいと考えられる。重松によると、特に「永続しない対象」は境界例的な心性に強い影響を及ぼしているということから、内的対象想起のうちの「永続しない対象」は携帯電話依存傾向に強い

影響を及ぼすと考えられる。

そこで本研究の目的は、携帯電話依存傾向の程度を測定し、重松 (2005) の内的対象尺度との関連性を検討することによって、携帯電話依存は単なるマナーの問題ではなく、内的対象の想起という心理的要因が関与していることを明らかにすることである。

ところで、携帯電話依存には2つの質の違いが見られると思われる。

正高 (2005) は「いったんケータイを使い出すと、日本人は誰しもたいへん奇妙な感覚におそわれるようで、常に自分のそばに置いておかないと、落ち着かない気分になる。/ 大事なものはメッセージではなく、それどころかメッセージが来るかどうかということですらない。メッセージがもたらされるチャンネルが確保されているかどうか、という点に関心の主眼が置かれるようになってしまっているのだ」と述べている。また、浅羽 (2001) や武田 (2002) は、要するに携帯電話が通じないと不安になるのは、単に実際の連絡に不具合が生じるからではなく、携帯電話が象徴している対人関係の絆が切れてしまう不安によるものであると述べている。上記からわかるように、携帯電話の依存に関する記述では、特に連絡を取る用事がなくてもとりあえず電波を介して繋がりを保つために携帯電話を持ち歩いていないと不安を感じることを、そしてまた、携帯電話を使って常に誰かと連絡をとっていないと不安になることの2点が挙げられている。

以上を踏まえて、本研究では、特に連絡を取る用事がなくてもとりあえず電波を介して繋がりを保つために携帯電話を持ち歩いていないと不安を感じる「いつでも繋がっていたい依存」と、携帯電話を使って常に誰かと連絡をとっていないと不安を感じる「誰かと繋がっていたい依存」があると想定した。

「いつでも繋がっていたい依存」は携帯電話の電波が届かないところへ行きたくない、常に携帯電話を持ち歩き連絡の取れる状況にいないと不安になることを指している。実際に、少し席を離れるだけの時に財布と携帯電話を持って行く人をよく見かけるが、彼らに理由を尋ねる

と、特に重要な連絡を待っているわけではないが、携帯電話を持っていないと落ち着かないし不安になるそうである。

「誰かと繋がっていたい依存」は用事もないのにメールや電話をし、とにかく人と連絡を取っていないと不安になり、イライラすることを指している。「今何してる?」とか「眠たいよ～」といった特に用件のないメールや電話をして、何かしら人と繋がっていないと落ち着かなくなり、相手からの返信がなかなか来ないと不安になり、イライラするそうである。

本研究では、携帯電話依存を「携帯電話をいつも持ち歩いていなかったり、しばらく携帯電話を使っていないと不安になること」と定義し、この2種類の質の違いが含まれた携帯電話依存尺度を作成したうえで、研究をすすめることとする。

## 仮説

仮説 (1) 携帯電話依存傾向には、特に連絡を取る用事がなくてもとりあえず電波を介して繋がりを保つために携帯電話を持ち歩いていないと不安を感じる「いつでも繋がっていたい依存」と、携帯電話を使って常に誰かと連絡をとっていないと不安になる「誰かと繋がっていたい依存」の2種類の傾向が認められるであろう。

仮説 (2) 内的対象の想起が正常に行われなかった人ほど携帯電話依存傾向が高い。特に内的対象の下位尺度「永続しない対象」得点が高いほど、携帯電話依存傾向が高いであろう。

## 調査内容および方法

### 携帯電話依存尺度について

本研究においては、「いつでも繋がっていたい依存」と「誰かと繋がっていたい依存」の2つの下位概念をもとに、最終的に19項目からなる「携帯電話依存尺度」を作成した。その項目作成の際は、ケータイ依存尺度 (今野, 川端, 上笹, 2004; 戸田, 門田, 久保, 森本, 2004; 廣濱, 野崎, 江島, 梅田, 平田, 2004) を参考にした。回答方法は5件法で行い、「まったくあてはまらない—1」「あまりあてはまらない—2」「どちらともいえない—3」「ややあてはまる—4」

「非常にあてはまる—5」とした。

### 内的対象尺度について

内的対象尺度は重松 (2005) の24項目を採用した。「まったくあてはまらない—1」「ほとんどあてはまらない—2」「あまりあてはまらない—3」「どちらともいえない—4」「ややあてはまる—5」「かなりあてはまる—6」「非常にあてはまる—7」の7件法である。

この尺度は、内在化された対象や記憶を想起する能力を測ることを目的に作成された。下位尺度は「永続しない対象」「悪い対象」「良い対象」の3つの要素から構成されている。「永続しない対象」尺度は「しばらく連絡がないと、もうその人から嫌われてしまったのではないかと心配になる」「絶えず会っていないと、関係が切れてしまうような気がする」などの10項目からなる。「悪い対象」尺度は「私は、親しい友人に対してもなんらかの疑いをもっている」「人から優しくされても、つい疑ってしまう」などの8項目からなる。「良い対象」尺度は「人からの自分に対する親切な言葉や行動は心のなかに刻み込まれている」「落ち込んだとき、誰か自分の味方になってくれそうな人のことを思い浮かべる」などの逆転項目6項目からなる。重松(2005)はこの尺度について十分な信頼性があるとしている。

### 調査協力者と調査時期

調査協力者は岐阜大学教育学部3年の学生108名（男性33名，女性75名）である。有効回答者数は106名（男性32名，女性74名）であり，そこから携帯電話を所持していない2名（男性1名，女性1名）を除外した104名（男性31名，女性73名）で分析を行った。なお調査は2005年12月中旬に授業時間に無記名にて実施した。

## 結果

### 携帯電話依存尺度の構成

まず，携帯電話依存尺度19項目の平均値，標準偏差を算出した。そのうち，フロア効果の見た項目が5項目あったが，本研究では携帯電話依存における質の違いを見たいために，あえてそれら5項目（項目番号9，10，12，13，15）を含め分析を行った。

次に19項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化から3因子構造が妥当であると考えられた。そこで3因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果，十分な因子負荷量を示さなかった3項目（項目番号7，14，16）を分析から除外し，再度主因子法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関をTable 1に示す。なお，回転前の3因子で16項目の全分散を説明する割合は50.40%であった。

第1因子は11項目で構成されており，『携帯電話を忘れると一日不安になる』『どんなところでも携帯電話の電源を切りたくない』など，携帯電話が使用できないことへの不安を感じているというような項目が集まった。これを「携帯電話使用不能に対する不安」（以下「使用不能不安」とする）と解釈し，第1下位尺度とした。この尺度の得点は，得点が高いほど携帯電話の使用不能に対する不安が強いことを表している。11項目の信頼性は $\alpha = .84$ となった。第2因子は3項目で構成されており，『用もないのに携帯で電話をかけてしまう』『用事もないのにメールを送ることがある』など，用事がなくても携帯電話で人と連絡を取りたいというような項目が集まり，これを「用事なしでも連絡」（以下「用なし連絡」とする）と解釈し，第2下位尺度とした。この尺度の得点は，得点が高いほど用事がなくても携帯電話で人と連絡を取りたいということを表している。3項目の信頼性は， $\alpha = .62$ となった。第3因子は2項目で構成されており，『仕事や授業中でもメールをする』『食事中に携帯電話が鳴れば，電話に出たりメールの返信をする』という項目が集まり，これを「マナーに反する使用」（以下「マナー違反」とする）と解釈し，第3下位尺度とした。この尺度の得点は，得点が高いほどマナーに反した携帯電話の使用をしているということを表している。2項目の信頼性は， $\alpha = .55$ となった。なお「使用不能不安」下位尺度得点は，平均 2.79，SD 0.77，「用なし連絡」下位尺度得点は，平均 1.96，SD 0.84，「マナー違反」下位尺度得点は，平均 3.22，SD 1.09であった。

Table 1 携帯電話依存尺度の因子分析結果 (Promax回転後の因子パターン)

項目番号	項目内容	F1	F2	F3
2	電話やメールの着信がないか何度も携帯電話を確認することがある。(B)	.77	.01	-.06
15	どんなところでも携帯電話の電源を切りたくない。(A)	.76	-.07	-.03
1	携帯電話を忘れると一日中不安になる。(A)	.62	-.09	-.03
9	家の中でも肌身離さず持ち歩く。(A)	.60	0.2	.20
11	少し席を離れるだけのときも携帯電話を持ち歩く。(A)	.57	.11	.09
3	携帯電話を忘れたら、取りに帰る。(A)	.51	.07	.14
17	暇があれば、とりあえず携帯電話をさわる。(A)	.51	.06	.13
13	携帯電話の電波が届かないところへは行きたくない。(A)	.51	.17	.06
5	携帯電話の充電が切れないように気をつけている。(毎日充電、充電器携帯など) (A)	.50	-.07	.18
6	相手からの返信が遅いと不安になる。(B)	.50	-.12	.0
8	メールをしている相手とは繋がっている気がする。(B)	.43	-.21	-.31
12	用もないのに携帯で電話をかけてしまう。(B)	-.05	.75	-.11
10	夜遅くても相手の携帯電話に電話してしまう。(B)	-.10	.73	.18
4	用事もないのにメールを送ることがある。(B)	.36	.43	-.33
19	仕事や授業中でもメールをする。(B)	.11	-.03	.58
18	食事中に携帯電話が鳴れば、電話に出たりメールの返信をする。(B)	.19	-.04	.48
(A) : 想定した「いつでも繋がっていたい依存」	因子間相関	I	II	III
(B) : 想定した「誰かと繋がっていたい依存」	I	—	0.31	0.19
削除項目 7 携帯電話を持っているなら、常に連絡が取れなければ意味がないと思う。(A)	II		—	0.18
14 携帯電話の使用料金が思ったよりも多くて驚いたことがある。(B)	III			—
16 電車の中でも電話をしたり、または応答したりする。(B)				

携帯電話依存の男女差の検討

男女差の検討を行うために、携帯電話依存の各下位尺度得点について t 検定を行った。その結果、いずれにおいても性差は見られなかった。Table 2 に平均値とSD, t値とp値を示す。

携帯電話依存の男女別相関

男女別の携帯電話依存下位尺度間の相関係数をTable 3に示す。

男性は、「使用不能不安」が「用なし連絡」と1%水準で有意な相関を示したのに対して、

女性は「使用不能不安」が「マナー違反」と1%水準で有意な相関を示した。

携帯電話依存下位尺度を用いたクラスター分析

携帯電話依存の「使用不能不安」得点と「用なし連絡」得点, 「マナー違反」得点を用いて、グループ内平均連結法によるクラスター分析を行い、4クラスターを得た。第1クラスターには41名, 第2クラスターには31名, 第3クラスターには20名, 第4クラスターには12名の調査対象が含まれていた (Table 4)。次に得られた4ク

Table 2 男女別の携帯電話依存の平均値およびSD

	男性(31名)		女性(73名)		t	p
	平均	SD	平均	SD		
使用不能不安	2.85	0.78	2.77	0.77	0.51	.n.s
用なし連絡	1.99	0.82	1.94	0.85	0.26	.n.s
マナー違反	3.11	1.11	3.26	1.09	-0.63	.n.s

Table 3 男女別の携帯電話依存の下位尺度間相関

	使用不能不安	用なし連絡	マナー違反
使用不能不安	—	.16	.35 **
用なし連絡	.65 **	—	-.04
マナー違反	.25	.35	—

\*\*p<.01 右上:女性 左下:男性

Table 4 携帯電話依存の各クラスター群の平均値とSD

	第1クラスター (41名)	第2クラスター (31名)	第3クラスター (20名)	第4クラスター (12名)
使用不能不安	2.83(.79)	2.21(.37)	3.39(.71)	3.20(.45)
用なし連絡	1.40(.34)	1.71(.60)	2.82(.54)	3.06(.84)
マナー違反	3.70(.80)	2.11(.74)	4.30(.52)	2.63(.38)

ラスターを独立変数、「使用不能不安」「用なし連絡」「マナー違反」を従属変数とした分散分析を行った。その結果、「使用不能不安」「用なし連絡」「マナー違反」のいずれも0.1%水準で有意な群間差が見られた。(使用不能不安： $F(3,100)=16.00$ , 用なし連絡： $F(3,100)=51.40$ , マナー違反： $F(3,100)=51.37$ , いずれも $p<.001$ )となった。

その後、Tukey HSDを用いた多重比較を行った。その結果、「使用不能不安」は、第3クラスターが最も高く、ついで第4クラスター、第1クラスター、第2クラスターとなっており、第2クラスターは他のクラスター、第3クラスターは第1クラスターとの間に5%水準で差が見られた。第3クラスターと第4クラスター、第4クラスターと第1クラスターの差は有意でなかった。

「用なし連絡」は、第4クラスターが最も高く、ついで第3クラスター、第2クラスター、第1クラスターとなっており、第4クラスターは第1クラスター、第2クラスターとの間に5%水準で差が見られた。第3クラスターは第1クラスター、第2クラスターと5%水準で差が見られた。第1クラスターと第2クラスター、第3クラスターと第4クラスターの差は有意ではなかった。

「マナー違反」は、第3クラスターが最も高く、ついで第1クラスター、第4クラスター、第2クラスターとなっており、第1クラスターと第3クラスターは他のクラスターとの間に5%水準で差が見られた。第2クラスターと第4クラスターの差は有意ではなかった。

まとめると以下のようなクラスター群であると理解できる。

第1クラスター：「使用不能不安」「用なし連絡」が低く、「マナー違反」が高いことから、携帯電話依存度としては低いがマナー違反をしてしまう群ということがわかる。

第2クラスター：「使用不能不安」「用なし連絡」「マナー違反」いずれも低いことから、4つの群の中で最も携帯電話依存度が低いと考えられる。

第3クラスター：「使用不能不安」「用なし連絡」「マナー違反」いずれも高いことから、4つの群の中で最も携帯電話依存度が高いと考えられる。

第4クラスター：「使用不能不安」「用なし連絡」が高く、「マナー違反」が低いことから、携帯電話依存度としては高いがマナーは守るといことがわかる。

#### 内的対象尺度

内的対象尺度は重松 (2005) に従って、「永続しない対象」「悪い対象」「良い対象」の下位尺度得点を算出した。「永続しない対象」下位尺度得点は、平均3.25, SD0.90, 「悪い対象」下位尺度得点は、平均2.86, SD0.92, 「良い対象」下位尺度得点は、平均3.48, SD0.74であった。内的整合性を検討するために各下位尺度の $\alpha$ 係数を算出したところ、「永続しない対象」で $\alpha=.79$ , 「悪い対象」で $\alpha=.80$  「良い対象」で $\alpha=.46$ と「良い対象」においては低い値であったが、「永続しない対象」「悪い対象」においては十分な値が得られた。

#### 内的対象下位尺度の男女差の検討

男女差の検討を行うために、内的対象の各下位尺度得点についてt検定を行った (Table 5)。その結果、「永続しない対象」下位尺度 ( $t(100)=-.491$ , n.s.) 「悪い対象」下位尺度 ( $t(100)=-.095$ , n.s.) には性差が見られなかったが、「良い対象」下位尺度 ( $t(100)=2.84$ ,  $p<.01$ ) については、女性より男性の方が1%水準で有意に高い得点を示した。このことより、重松 (2005) と同様に女性の方が「良い対象」を想起しやすいという結果が得られた。

Table 5 男女別の内的対象想起の平均値およびSD

	男性(31名)		女性(73名)		t	p
	平均	S D	平均	S D		
永続しない対象	3.18	0.75	3.28	0.95	-0.49	.n.s
悪い対象	2.85	0.82	2.87	0.97	-0.10	.n.s
良い対象	3.79	0.61	3.35	0.76	2.84	p<.01

Table 6 男女別の内的対象想起下位尺度間の相関

	永続しない対象	悪い対象	良い対象
永続しない対象	—	.64 ***	.11
悪い対象	.65 ***	—	.14
良い対象	-.02	-.32	—

\*\*\*p<.001 右上：女性 左下：男性

内的対象下位尺度の男女別相関

男女別の内的対象下位尺度間の相関係数を Table 6 に示す。男性では、「永続しない対象」が「悪い対象」と0.1%水準で有意な相関を示し、同様に、女性でも「永続しない対象」が「悪い対象」と0.1%水準で有意な相関を示した。このことから、男性に関しても女性に関しても、「永続しない対象」と「悪い対象」が互いに強い関連があることが示された。

内的対象下位尺度を用いたクラスター分析

内的対象尺度の「永続しない対象」得点と「悪い対象」得点、「良い対象」得点を用いて、グループ内平均連結法によるクラスター分析を行い、4クラスターを得た。第1クラスターには35名、第2クラスターには33名、第3クラスターには18名、第4クラスターには18名の調査対象が含まれていた (Table 7)。次に得られた4クラスターを独立変数、「永続しない対象」「悪い対象」「良い対象」を従属変数とした分散分析を行った。その結果、「永続しない対象」「悪い対象」「良い対象」のいずれも0.1%水準で有意な群間差が見られた。(永続しない対象： $F$

(3,100)=54.17, 悪い対象： $F$ (3,100)=50.11, 良い対象： $F$ (3,100)=43.01, いずれも $p<.001$ ) となった。

その後Tukey HSDを用いた多重比較を行った。その結果、「永続しない対象」は、第2クラスターが最も高く、ついで第4クラスター、第3クラスター、第1クラスターとなっており、第2クラスターと第4クラスターは他のクラスターとの間に5%水準で差が見られた。第1クラスターと第3クラスターの差は有意ではなかった。

「悪い対象」は、第2クラスターが最も高く、ついで第4クラスター、第1クラスター、第3クラスターとなっており、第2クラスターは第1クラスター、第3クラスターとの間に5%水準で差が見られた。第4クラスターは第1クラスター、第3クラスターと5%水準で差が見られた。第1クラスターと第3クラスター、第2クラスターと第4クラスターの差は有意ではなかった。

「良い対象」は、第2クラスターが最も高く、ついで第1クラスター、第4クラスター、第3クラスターとなっており、第2クラスターは第3クラスター、第4クラスターとの間に5%水準で差

Table 7 内的対象想起の各クラスター群の平均値とSD

	第1クラスター (35名)	第2クラスター (33名)	第3クラスター (18名)	第4クラスター (18名)
永続しない対象	2.56(.61)	4.13(.47)	2.64(.68)	3.55(.37)
悪い対象	2.25(.64)	3.60(.60)	2.02(.43)	3.52(.51)
良い対象	3.87(.49)	3.89(.59)	2.68(.40)	2.73(.36)

が見られた。第1クラスターは第3クラスター、第4クラスターと5%水準で差が見られた。第1クラスターと第2クラスター、第3クラスターと第4クラスターの差は有意ではなかった。

まとめると以下のようなクラスター群であると理解できる。

第1クラスター：「永続しない対象」「悪い対象」が低く、「良い対象」が高いことから、内的対象の想起は比較的正常に行われているが、良い対象を想起することが困難であることがわかる。

第2クラスター：「永続しない対象」「悪い対象」「良い対象」いずれも高いことから、4つの群の中で最も内的対象の想起が正常に行われていないと考えられる。

第3クラスター：「永続しない対象」「悪い対象」「良い対象」いずれも低いことから、4つの群の中で最も内的対象の想起が正常に行われていると考えられる。

第4クラスター：「永続しない対象」「悪い対象」が高く、「良い対象」が低いことから、内的対象の想起は正常に行われているとはいえないが、良い対象を想起することができるとわかる。

### 内的対象の想起と携帯電話依存の関連

#### 男女別の相関

携帯電話依存に影響を及ぼす内的対象の想起について男女別の相関を見た。結果はTable 8に示す。

その結果、女性においてのみ内的対象尺度の「永続しない対象」が携帯電話依存の「使用不能不安」と1%水準で有意な相関を示した。女性において内的対象の想起が携帯電話依存と関

連があることが確認された。男性については有意な相関は見られなかった。

#### 携帯電話依存4群と内的対象4群の関連について

内的対象尺度においても、携帯電話依存尺度においても、クラスター分析によって調査協力者をそれぞれ4群に分けることができた。それら4群同士のクロス集計に対してFisherの正確検定を行った。

その結果、内的対象尺度の4群と携帯電話依存尺度の4群では有意な相関は見られなかった。

#### 考察

仮説では、「いつでも繋がっていたい依存」と、「誰かと繋がっていたい依存」の2種類の傾向があるという仮説を立てた。作成した携帯電話依存尺度の因子分析からは、3因子が抽出された。想定した2因子にわかれはしなかったが、「使用不能不安」は想定した「いつでも繋がっていたい依存」傾向と類似する因子になった。また、「用なし連絡」についても、項目数が少ないが「誰かと繋がっていたい依存」傾向と思われる項目が集まった。携帯電話依存尺度の中では「マナー違反」を異質なものとして考えると、想定した2つの傾向があるという仮説は検証されたといえるであろう。

今回の尺度構成では、各因子の項目数にかなりの偏りが見られた。また、今回の調査では携帯電話による「電話」と「メール」の区別をせずに項目を入れて調査を行ったが、大学生にとって携帯電話の「電話」と「メール」の使用に対する意識の違いは大きいようである。実際に項目を比べてみると、携帯電話依存尺度の「(4)用もないのにメールを送ることがある」と「(12)

Table 8 男女別の内的対象想起と携帯電話依存の下位尺度間相関

	使用不能不安	用なし連絡	マナー違反	永続しない対象	悪い対象	良い対象
使用不能不安	—	.16	.35 ***	.36 **	.01	-.06
用なし連絡	.65 ***	—	-.04	-.11	-.02	-.03
マナー違反	.25	.35	—	.09	-.16	.00
永続しない対象	.15	.04	.26	—	.64 ***	.11
悪い対象	.22	.02	.16	.65 ***	—	.14
良い対象	-.23	.19	.02	-.02	-.32	—

\*\*p<.01 \*\*\*p<.001 右上：女性 左下：男性

用もないのに電話をしてしまう」では、回答の分布に大きな差がみられた。(4)の項目では、「非常にあてはまる」と「ややあてはまる」と答えた人が合わせて30名だったのに比べて、(12)の項目では「非常にあてはまる」と「ややあてはまる」と答えた人が合わせて4名しかいなかった。このことから、大学生にとって携帯電話の「電話」と「メール」の使用に対する意識の違いは大きいといえる。

今回調査を行ってみて大学生における携帯電話の「電話」と「メール」に対する意識の違いが判明したので、その区別をつけて尺度の項目を追加し、より信頼性の高い尺度に洗練させていくことが、大学生の携帯電話依存傾向の様相をより明らかにしていくだろう。

携帯電話依存傾向の3つの下位尺度得点を用いてクラスター分析した結果、興味深い4群に分けることができた。1群は携帯電話依存度としては低いがマナー違反をしてしまう群であり、2群は4つの群の中で最も携帯電話依存度が低いと考えられる群、3群は4つの群の中で最も携帯電話依存度が高いと考えられる群であり、4群は携帯電話依存度としては高いがマナーは守るという群として考えられた。

男女別の携帯電話依存傾向下位尺度間の相関からは、男性に関しては、携帯電話の使用ができないことへの不安を感じやすい人は、用事がなくても携帯電話で人と連絡を取りたいと感じる傾向が強くあるということがわかった。廣濱・野崎・江島・梅田・平田(2004)が「携帯電話依存高位群は、寂しさを感じたときに携帯電話や携帯メールをすることで、寂しさを紛らわしており、孤独を嫌う傾向が示唆された」と述べていることを踏まえると、男性において、携帯電話の使用できない不安を強く感じる人には、孤独を嫌い常に連絡を取ることで人と繋がっていることを確認したい傾向があると考えられる。

またマナー違反との相関が見られたのは、女性における「使用不能不安」のみであった。すなわち女性に関しては、携帯電話の使用ができないことへの不安を感じやすい人は、マナーに反してしまう傾向があるということがわかった。女性がマナーに反した携帯電話の使用をしてし

まう傾向にあるのは、電車内で化粧を平気ですることと同様に、公共の場や他に人がいるような場所においてもあまり人の目を気にせずに、自分の世界へ入りやすい傾向がある可能性が考えられよう。

齊藤環(浅羽, 2001, p143)は「携帯電話で話している人間には、周りに透明な壁ができてしまって、周囲が見えない。ギャルの化粧も同じようなもの。公共のところにいるのに、透明な密室によって解離してしまっている。周囲の視線が目に入らなくなる独特の解離空間だから、ある種の退行が起こってくる。非常に初期衝動が行動化されやすくなってしまう。」と述べている。このような指摘を踏まえると、「マナー違反」には、心理的解離や退行のしやすさと関連性がある可能性も考えられるだろう。これらの点を今後調査することで、社会的問題となっている携帯電話依存とマナー違反にかかわる心的要因がさらに明らかとなるだろう。

携帯電話依存と内的対象想起との関連については、女性においてのみ内的対象想起の下位尺度の「永続しない対象」と携帯電話依存尺度の「使用不能不安」の間で有意な正の相関が見られただけであり、内的対象想起の「良い対象」「悪い対象」ともに携帯電話依存傾向には関連が見られなかった。また携帯電話依存のクラスター4群と内的対象想起のクラスター4群との間における関連性は認められなかった。

このことから、内的対象想起と携帯電話依存との関連性については明確な結果は得られなかった。しかし、今回の調査からは、女性においては「永続しない対象」想起が携帯電話依存に影響を及ぼす可能性が認められたといえよう。

本研究においては男性調査協力者の少なさなどの調査サンプルに問題があった可能性が否めない。また先に述べたように携帯電話依存尺度も改善の余地があるため、携帯電話依存と内的対象想起との関連を確かめるためには、さらなる研究が必要であろう。

## 文献

浅羽通明 2001「携帯電話的人間」とは何か 宝島



社

- 廣濱実・野崎浩成・江島徹郎 他 2004 大学生における携帯電話利用の実態調査—家族とのコミュニケーションに及ぼす影響の分析 (e-Learning向け動的デジタル教材の制作と配信) 教育システム情報学会研究報告 19(2) pp38-42
- 今野裕之・川端美樹・上笹恒 2004 携帯電話に対する意識と行動 —ケータイ依存に関わる個人特性について— 目白大学短期大学部女子教育研究所研究レポート16巻 pp.1-30
- 正高信男 2005 考えないヒト- ケータイ依存で退化した日本人 中央公論新社
- 重松晴美 2005 青年期における孤独感および内的対象の想起に関する研究—境界例心性を通して 心理臨床学研究 22(6) pp.659-664
- 総務省 (編) 2004 平成16年度版情報通信白書 ぎょうせい
- 武田徹 2002 若者はなぜ「繋がり」たがるのか P HP研究所
- 戸田雅裕・門田和之・久保和毅・森本兼囊 2004 女子大学生を対象とした携帯電話依存傾向に関する調査 日本衛生学雑誌59(4) pp.383-386

